

アブカイク

サウジの治安状態は落ち着きを示し始めていた。

治安部隊は一月下旬に新指名手配者リスト中のテロリストを四人、その他のテロリストを五人逮捕した。

そして、二月に入ってもしばらくは何事も無く推移した。

ところが、二月二四日に東部油田地帯の心臓部であるアブカイクが沙漠のサソリに攻撃されてしまう。

その前日、スルタンとカリムは激論を戦わせていた。

「僕はずっと兄さんを尊敬して兄さんの後を追って来た。兄さんのようにコーランも完全に暗誦出来るようになった。しかし、もうこれ以上ついてゆくことは出来ない。僕には兄さんほどの記憶力も理解力も無い。兄さんのような包容力のある高潔な人格者でも無い。兄さんのように人々の尊敬を集めてもいない。それに、とにかく僕にはもう矛盾に満ちたこの国の現状には我慢が出来ないんだ。僕の師事したウラマーも

ついこの間捕らえられてしまった。また、同士の数も急激に減って来た。どうしてもここで政府に一矢(いっし)を報いたい。兄さんのように政府がより良い方向へと変わるのを息長く待つことなど僕には出来ない。今日これから僕はアルコバルに向かう。そこで同士と落ち合ってサウジ政府及び世界に思い知らせるようなことをしたい」

カリムはスルタンの反応が十分に判っていた。ただ、最後に自分の信条を伝えたかったのだ。

「カリム、いつも私が言っているように、我々はイスラムの根本に則って行動するべきだ。早まってはいけない。お前は一体何のために一生懸命勉強してきたのだ。最難関のアラムコに入り将来は約束されたようなものだ。サード新国王の改革に期待して一緒に改革に挑んでみようじゃないか。国王も皇太子時代から議会選挙のより一層の民主化、国王選出方法の改善を提案して来ている」

スルタンもカリムが慎太郎に銃口を向けた時から、カリムを説得出来るとは思っていなかった。

「兄さん、それは兄さんの言う通りかもしれない。だけど、

ここでこうしている時でもイスラエルはパレスチナ人を弾圧している。アフガン、イラクでは外国の軍隊による侵略が行われている。罪もない女子供まで犠牲になっているんだ。サウジは平和だが近くには戦争状態のところが沢山ある。また、サウジ国内だって相変わらず貧富の差が大きい。奢侈(しゃし)な生活をするものがある一方、明日の生活にも困っているものがある。それは兄さんも知っている通りだ。僕は恵まれないアルバハの人々のことを考えると心が痛む。僕にはこんな状態を一刻も放つて置くことは出来ないんだ」

「私も放つて置いていくわけではない。サウジ内外のパレスチナの人々にも支援の手を差し伸べている。私の会社ではパレスチナ人の女性を部長に抜擢(はつてき)したことをおまえも良く知っているだろう。また、アルバハでは多額のザカート(喜捨)を続けてきた。私は、少しでも貧しい人の役に立てば良いと思っていつも活動している」

「だから、兄さんは偉いと言っているじゃないか。尊敬している。しかし、それで社会全体が改善されたわけではない。兄さんが国王だったら良かったのと思っているくらいだ」

「サウジ社会は基本的に保守的だ。革命のように一夜にして全てが変わるわけがない。また、変われば問題かもしれない。静かに、少しずつ話し合いで前進していくのが最も良いのだ。我々モスレムはシャーリアに基づいて生活しているのだからその枠の中で進まなければならない」

二人はいつもどうどう巡りの議論をしていた。

決してその溝が狭まることはなかった。むしろ、徐々に広がってきていた。

「兄さん、僕は何もしないでいることに罪悪感を感じてしまっているんだ。シェイクの家は兄さんに継いでもらうんだし僕の勝手にさせて欲しい」

「カリム、おまえの言うことは良くわかる。兄さんの出来ることは限られているかもしれない。しかし、それはおまえについてもおまえは、一夜でこの国を変えることが出来るとも思っているのか。頭の良いおまえのことだ、それは良くわかっている筈だ」

「兄さん、良くわかっているよ。これから僕はアルコール

に行くと言ったけど、アラムコにいる僕は会社の警備がいか
に嚴重かは痛いほど良くわかっている。二重、三重の安全対
策が設けられている。何かあった場合の復旧も早い。だけど、
僕のような人間がサウジに居ることを世界に訴えたいんだ。
アラムコの操業に影響を与えることが出来れば世界が注目
する。それがサウジだ。例え操業に影響を与えられなくても
良い」

「カリム、もう一度、落ち着いて考えてくれ、頭を冷やして
みてくれ。少しは、アルバハの父のこと、家族のこと、そし
てアルバハの緑、アルバハの山々を思い出してくれ。そして、
伝統あるシェイク家のことも」

「兄さん、今の僕には失うものなど何も無いと思っている。
父には、僕がいなくても兄さんや多くの兄弟がいる。僕には
イスラムの大儀がある。それを行うことが天国に通じる道だ
と思っている。もう、心は定まっているんだ。例え兄さんで
もそれを止めることは出来ない」

「カリム、イスラムは平和を愛する宗教だ。それを決して忘
れないように」

「兄さん、兄さんはアルナミを説得出来なかったよね。今、僕にはアルミナの気持ちが良いわかるんだ」

「……………」

スルタンは、言葉に詰まった。スルタンの頭の中にはアルミナを失った時の空しさ寂しさが鮮明に蘇った。

スルタンはカリムの手を掴み出て行くのを止めようとした。しかし振り向いたカリムのもう一方の手には拳銃が握られていた。

「兄さん、手を離してくれ」

スルタンは拳銃を恐くはなかった。撃たれても構わないとも思った。

しかし、次にカリムの口から出た言葉はスルタンの気持ちを粉々に砕くものだった。

「兄さん、僕が兄さんの探していた“月の欠片”だ」

「えっ……………」

「沙漠のサソリの統領、“月の欠片”さ」

「……………」

スルタンは静かにカリムの手を離した。

スルタンの目から涙が一筋流れた。

カリムの目には涙が溢れていた。

「兄さん、さようなら」

カリムは表に出ると静かにドアを閉めた。

スルタンはその閉められたドアを空しくいつまでも見つめていた。

サウジ内務省の発表によれば、翌二月二四日に発生したアブカイク石油施設に対するテロ攻撃のあらましは次のようなものだった。

午後三時頃にアラムコ社用車を装った二台のジープが脇門から製油所への侵入を試みたが治安関係者がこれを見破って侵入を阻止し銃撃戦となった。

結局、この二台のジープは入口手前で爆発し炎上した。幸い製油所には損害はなく石油生産には何の影響もなかった。爆発により小火災が発生したものの直ぐに鎮火された。

攻撃したテロリスト二名は車もろとも爆死した。

侵入を阻止した守衛二人が重傷を負い病院に運ばれたものの翌日死亡した。また、爆発炎上した車の他にも犯行グループの車が数台あったが直ぐにその場を逃げ去った。

この攻撃直後、治安関係の専門家が、サウジ政府はテロリストの攻撃を無事阻止したことによりサウジの治安体制が万全であることを内外に示したとの見解を表明した。

しかし、この攻撃を受けて二四日の原油価格は二・三七ドル上昇し六二・九一ドルとなった。そして、この価格上昇が夏場に史上最高値を塗り替える切っ掛けとなってしまった。いつもながらサウジの政治不安が市場に与える影響は大きかった。

慎太郎はすぐに南と連絡をとった。

南によれば、本当のところはテロリストは入口の中に侵入することに成功したという。すんでのことで危うく大被害を

蒙るところだった。大被害を受けたとすれば原油価格がどこまで上昇したかは想像も付かない。

翌二五日には沙漠のサソリが犯行声明を発表した。これにより今回死亡した二人のテロリストが新指名手配者であることが判明した。

この攻撃に対するサウジ政府の対応は素早く二七日早朝にはリヤド東部でアブカイクから逃げ帰った沙漠のサソリの隠れ家を急襲し、最重要指名手配者リスト中の残り一人、沙漠のサソリのリーダー・ナセル、新指名手配者リスト中のテロリスト二人とその他のテロリスト二人を射殺した。

周辺住民によれば、午前五時に銃声が聞こえその後二時間近く銃声、爆発音が続いたという。また、ヘリコプターが長時間にわたり近辺を低空飛行していたという。

スルタンは、カリムのことを心配していた。

カリムの言動からすればアブカイクの石油施設襲撃に加

わったことはほぼ間違いない。自爆したテロリストでなかったことは明らかだったが、治安部隊の急襲で殺害された五人の中に入っているかもしれないと危惧していた。

すると、玄関のドアが開きカリムが現われた。シマーグは無く髪は乱れていた。白いトープは汚れ、カリムはまるで戦場から逃れてきた戦士のように疲弊していた。手には拳銃を握り締め体全体をぶるぶると震わせていた。

「兄さん、済まない。覚悟は出来ていたけど最後に一目兄さんを見たくてやっとのことまで逃げてきた。私を匿う必要はない」

「何を言う。兄さんは、早速サード国王と連絡をとってみる」
「兄さん、止めてくれ。僕は沙漠のサソリの統領、“月の欠片”だ。そんなことをすれば兄さんに迷惑がかかる。僕はもう良い」

「カリム、とにかく、まず、自分の部屋で休みなさい」
スルタンは、震えているカリムの体をしっかりと抱きかかえた。その体はひどく熱かった。相当の熱があるのだろう。

「兄さん、寒い……。濟まない」

「カリム、濟まない。兄さんはおまえに隠していたことがある。実はナセルは兄さんの親しい友人だったのだ」

「えっ……。あのリーダーのナセルが……」

「そうだ。アルミナ以上に彼に資金援助を続けてきた。それで、アルバハでは兄さんのことを沙漠のさそりの黒幕という人もいる。言われても仕方がない」

「ナセルはさっき僕の目の前で治安部隊に殺されてしまった」

カリムは相変わらず小刻みに体を震わせながら泣いていた。

「それに、ビンラディンも昔からの友人で親しくしてもらった」

「そうか、兄さん、教えてくれて有り難う。僕は兄さんを誤解していた」

「だから、おまえの気持ちは良くわかるどころではない。私のような役割の人間も必要なのだ」

「兄さん、兄さん、これで僕には思い残すことはない。僕は

兄さんのためにも働いたんだよね」

「そうだ。カリム」

スルタンはようやく二階のカリムの部屋に連れて行った。

「兄さん、寒い。辛い。僕はもう駄目だ」

「カリム、そんなことはない。とにかく、体を休めることが先決だ」

スルタンがカリムをベッドに横たえようとしたその時、急に二人の男が入って来た。

外にはパトカーのサイレンも聞えなかったしその男達は治安部隊や警察の制服を着ているわけではなかった。

「沙漠のサソリの統領、“月の欠片”だな」

一人の男がそう言った。カリムはスルタンを脇にどかすとベッドの脇によろよると立ち上がった。そして、震える手で必死に拳銃をその男の方に向けた。その瞬間、その男の拳銃が火を噴き銃弾がカリムの胸を撃ちぬいていた。カリムは拳銃をかざし大量の血を噴出させながらそのままどうと仰向けにベッドに倒れて行った。

「カリム！、カリム、カリム！」

スルタンはカリムを抱きかかえ大声で呼びかけたが既に息絶えていた。スルタンはびくりとも動かないその体を揺すりながら抱き締めて泣いた。

「カリム、カリム、生き返ってくれ！もう一度、声を聞かせてくれ！」

二人は、スルタンのところに静かに近づくとスルタンをカリムの体から引き離した。

「何をする、これは僕の弟だ」

抵抗するスルタンを一人が羽交い絞めにしてもう一人はベッドに火を放った。

「止める、弟の体に何をする」

スルタンは羽交い絞めの男を投げ飛ばした。

「シエイク・スルタン、おとなしくして下さい。言うことを聞かないと貴方のためになりませんよ。これは“月の欠片”なんです。決して貴方の弟さんなどではありません」

スルタンは、男がスルタンの名前を知っているのに愕然とした。

「お前達は何者だ。警察でも治安部隊でもない。一体何者なのだ」

二人は、必死でスルタンを押さえつけると、

「我々は、アブドルアジズ殿下の使いのものです」

と言った。それを聞いてスルタンの力はスーと抜けて行っ
た。

スルタンはみるみる内に火に包まれていったカリムの体をなす術もなく見つめていた。

「シエイク、貴方には一切危害を加えることはありません。

ここに、アブドルアジズ殿下からの手紙があります。後で読んで下さい」

そう言うと一人はスルタンから手を離し、窓際に行つてワードローブの中の布団に火を点けた。そして、スルタンのところに戻ってきて抵抗するスルタンを二人で連れ出した。三人が表に出た時、パトカーがサイレンを鳴らして集まってきた。そして、パトカーからどかどかと警官が出て来ると三人の姿を無視して、あたかもテロリストと銃撃戦を繰り広げて

いるかのように盛んにスルタンの家に銃撃を加えた。スルタンの家の二階からは火の手があがり壁には無数の弾痕が残った。

その二七日の夜、スルタンから慎太郎に突然電話が入った。スルタンはかなり慌(あわただ)しいようだった。その声も、鼻声で少し上ずっていた。

「慎太郎、突然だが、リヤドを離れることになった。アブドルアジズがイラクにでも行ったらどうかというもんだからイラクに行こうと思っている。イラクでは、フセイン政権の崩壊以来、少数派になってしまったスンニ派の支援をするつもりだ。民主選挙の結果は、当然のことながら、人口の多いシリア派の圧倒的勝利になった。それなのに、いや、それ故かもしれないが、シリア派によるスンニ派の人々の虐殺、不当な差別にはひどいものがある。これは、スンニ派の宗主とも言える我が国にとって大変重要な問題なんだ」

「えっ、イラクに」

慎太郎は、そう言ったきり言葉が詰まった。

「慎太郎、済まないが、今は詳しく説明をしている時間はない。落ち着いたらまた連絡する。それでは、元気で……」
そう言うと、スルタンからの電話は切れた。

慎太郎は、すぐにスルタンの携帯に電話を入れてみたが、もう繋がらなかった。急いでオスマに連絡してスルタンの家に急行した。

慎太郎は、スルタンの家に着いて愕然とした。家の周りにはロープが張り巡らされ立ち入り禁止となっていた。そして、治安部隊がものものしく周囲を固めていた。建物には無数の弾痕が残り二階の壁の一部は炎を受け煤(すす)で真っ黒に汚れているのが見えた。煙が燻り薬きょうの臭いがした。

オスマが周囲にいた野次馬に聞いたところでは、つい先ほどまでこの家で銃撃戦があつてテロリスト一人が射殺され一人が逃走したとのことだった。射殺されたテロリストには二四日にアブカイクの石油施設で発生した自爆テロに関与した容疑があつたらしいとのことだった。

慎太郎は殺害されたテロリストとはスルタンの弟カリム
のことで逃げたテロリストとはスルタンのことに違い無い
とは思ったが、スルタンがテロリストである筈は無いと相変
わらず思っていた。

慎太郎は、突然の出来事に気が動転していた。しかし必死
に考えていた。

慎太郎はスルタンの電話を受けてからオスマの到着を待
ってレジデンスを出発した。しかし、その待ち時間はほんの
僅かだった。ここに到着するまでには三〇分間程度しかかか
っていない筈だ。スルタンの家に残っていた弾痕、被害状況
からすると、相当長い間銃撃戦が行われたように見える。銃
撃戦の最中にスルタンが電話を掛けて来る筈はない。その時
には脱出していたのだろうか。そうとすれば、どうしてスル
タンがこのような嚴重な警戒網から脱出し電話をかけられ
たのだろうか。慎太郎には不思議だった。治安部隊からスル
タンに対してさっきスルタンが言っていたようなイラク行
きなど何らかの交換条件が示され、スルタンがそれを止むを

得ず飲んだということなのだろうか。

いずれにしても、既にスルタンはここにはいない。本当にイラクに向かってしまったのだろうか。慎太郎は心配だった。

慎太郎の心の中には、あの月明かりの中で微笑んでいたスルタンの顔がうつすらと浮んできた。スルタンの顔は、夜空に浮かぶ月の、まるで、その月の欠片のように、月の傍らに見えていた。イスラム信仰心の厚い敬虔なモスレム、月の欠片……

そして、慎太郎は、真っ白なトーブ姿に身を包んだ長身のスルタンがサウジ伝来の神剣ラハイアンを振りかざしながら空の彼方に消え去って行く幻影を見た。

石油先物市場はこのテロ攻撃により石油供給に最大の懸念が発生したと受け止めて原油価格は高騰した。しかし慎太郎はそう考えてはいなかった。慎太郎は、この攻撃が沙漠のサソリの最後のあがきではないかと思っていた。

サウジのテロ対策は、慎太郎の予想した通り着実に進んだ。新指名手配者リストの三六人も残すところは最大一八人と見られていたし、これらのテロリストもその殆どが海外にいるのではないかと考えられていた。

また、サウジ政府の発表では、二〇〇一年九月一日の米国における同時多発テロの発生以来、サウジ治安部隊はサウジ国内で一二〇人のテロリストを殺害し八〇〇人以上のテロリストを逮捕した。

慎太郎は、サウジ国内のテロ予備軍が一万二〇〇〇人以上いるとの情報も入手していた。しかし、サウジ治安部隊の手入れにより沙漠のサソリのリーダーが殺害されその都度リーダーを格下のものへと繰り下げて行っていることなどを目のあたりにして、慎太郎は沙漠のサソリが壊滅的な打撃を受けているものと思っていた。そして、現在の彼らの組織力では最高のセキュリティを誇るサウジ石油施設にテロ攻撃を加え打撃を与えることなどほとんど不可能だろうと見て

いた。

ただ、サウジ治安部隊のテロ対策も多くの苦痛を伴うもので決して容易なものではなかった。それは、これまでに治安部隊に四〇人以上の死者を出していることから明らかだ。サウジでは治安部隊とテロリストとの間で文字通りの死闘が繰り広げられていた。しかし、何よりも、この戦いを複雑な想いに行っているのは、サウジ人の多くがテロリストの主張に共感を持っていること、それにイスラム原理主義者の主張が一般のサウジ人の基本的考え方とそれほど離れていないと思われることだ。

慎太郎は、一九九二年九月に一〇七人の有力宗教指導者が署名した勧告覚書の内容を想い起していた。

- ・ 例え防衛が目的であろうと、サウジはどのような外国の勢力にも依存してはいけない
- ・ 西側の利益になるような外交政策を非難する
- ・ 国民の利益よりも世界経済の安定を考えた石油政策を

非難する

・ロイヤルファミリーや政府高官の腐敗と縁故主義を非難する

幸いなことに、現サード国王はイスラム本流のスルタンが支持しているように相対的に前サウド国王のハイル家よりもイスラム保守派の反発を受けにくいのではないかと、慎太郎には思われた。

慎太郎はイブラヒムそしてスルタンがいなくなってから、これまでとは異なる身に迫る危険をひしひしと感じていた。アブドルアジズの逆鱗に触れてから全ては変わった。そして慎太郎は一刻も早くリヤドを離れることにした。いつ災難がふりかかってもおかしくはない。急がなければ・・・

最初に東京の石渡に相談したところ即決だった。石渡は南に後を任せ即刻帰国するようにと言ってくれた。必要ならばその都度東京からの出張でカバーすれば良いとのことだった。

日本大使館の林には、急に帰国することになったことプロジェクトKについては引き続き南が担当して行くことを告げた。林は慎太郎の急な帰国に最初は驚いたようだったが、すぐにプロジェクトKの話がまとまったところで大使館に話をしてくれれば良いから心配するなと快く言ってくれた。

続いて植木に別れの挨拶をしたところ、植木も突然の話に驚いていた。

植木は、昨年イブラヒムが捕まり今度は慎太郎が急にサウジを離れるという展開に困惑していた。慎太郎は盛んに残念そうにしている植木を見ると心残りだった。しかし、それは仕方の無いことだった。植木には、東京に戻ったら慎太郎に連絡するよう頼み東京本社の電話番号を手渡した。

ハッサンも盛んに残念がってくれた。慎太郎も名残惜しかった。通いつめたハッサンの店を懐かしく見回した。

香水の入ったキャビネット、マップスースの入ったケース、香木の入った大きな箱、奥の事務室、ソニーのステレオ、皆懐かしかった。

ハッサンは、気前良く饞別(せんべつ)だと言って豪華な金

色の額縁に入った大きな絵をくれた。その絵はサウジの金持ちらしく高さ約一メートル幅約一メートル三〇センチくらいは優にある美術館にあってもおかしくないほど大きなものだった。慎太郎はこれまでこんな大きな絵を買ったことなど無かった。サウジ人にすれば普通のプレゼントかも知れなかったが馴染みの無い慎太郎は戸惑った。ハッサンは慎太郎がマーモール、マプスースを心底気に入り、サウジの生活、文化に親しんでくれたのが殊の外嬉しかったのだ。そして、サウジのことをいつまでも憶えておいて欲しいと思いこの絵をプレゼントすることにした。ハッサンはその絵は昔の自宅の中庭を有名な画家に描かせたものだと言明した。

絵の真中には中庭が描かれ、その周りを岩と泥で出来た伝統的なアラブの家が囲んでいる。中庭にはサウジらしい熱い陽射しが燦燦と降り注いでいる。そして、家の前には水瓶、庭用の食卓などが雑然と横たわっている。そこには、正しくアラビアらしい光景が生き生きと描かれていた。慎太郎は一目見てその光景が気に入った。本当にこのような貴重なものを貰って良いのだろうかと気兼ねするほどの大作で慎太郎

には嬉しさを飛び越して申し訳なく思えたくらいだった。

ハッサンは慎太郎のその嬉しそうな顔を楽しげに眺めていた。慎太郎は早速その絵を逆瀬川の実家に郵送することにした。

「マツサラーマ(さようなら)」

慎太郎がそう言うと、ハッサンはアラブ式の抱擁をして慎太郎の頬に別れのキスをした。

翌朝、佐々木支店長にリヤドを離れることを告げると、佐々木は、

「後から来たのに先に帰るのかい。まあ、確かに、この国の場合には前髪を引かれることはあっても後ろ髪を引かれることはないかもしれない。ワッハッハ」

などと冗談を言いながら、すぐに全ての手続きをするよう笠原に言いつけた。

慎太郎のレジデンスの契約関係なども全てリヤド支店が代わって面倒を見てくれることとなった。レジデンスは途中

解約も出来ないわけではないが、残る契約期間は三カ月程度だったので、佐々木は解約をしないで迎賓館として使用するなどとこれまた冗談を言っていた。リヤドへの出張者の宿としても格好の場所だった。

レジデンスは家具調度品付きだったし、単身赴任だった慎太郎は簡単に旅支度を整えることが出来た。後は、フライトスケジュールに合わせて出発の日を調整するためにリヤドに残らなければならないだけだった。

佐々木支店長、笠原を含め、リヤド支店の同僚がレジデンスに近い中華料理店・來々飯店で豪華な送別会を開いてくれた。特別にオスマもその席に呼んでくれた。

佐々木が最初にプロジェクトKの成功を称え送別の言葉を述べると、慎太郎にはこの二年間のリヤドの生活が昨日のことのように次から次へと思い出されてきた。

レジデンスを出発する直前に担当のニヤマトラが慎太郎の部屋にやってきた。

ニヤマトラは、既に昨日、慎太郎の部屋の最終チェックを済ませていたので何の用事も無い筈だった。単に見送りをしたいのだと言う。

慎太郎は、これまでのニヤマトラの特別の手配に改めて礼を言っただけで、冗談半分に最終チェックの結果何の問題もありませんでしたという文書を作って署名が欲しいと言ってみた。

真面目なニヤマトラはその映画俳優のように綺麗で気高い顔に微笑みを湛えながら喜んで署名すると応えた。

早速、慎太郎は置いてあった便箋に、すらすらと英語で文書を作りそこにニヤマトラの署名を貰った。ニヤマトラの署名は大変美しいものだった。良い記念になった。

慎太郎は、ニヤマトラと固い握手をした。

ニヤマトラは、昨日、部屋のキーをレセプションに置いて行ってくればそれで良いと言っていたが折角なのでニヤマトラにキーを渡すことにした。

キーを渡すと言うのは感慨深いものだ。

ニヤマトラも名残惜しそうにそれを受け取った。

慎太郎は、最後に、部屋の窓に行くと、見慣れたリヤドの風景をこれが見納めと感慨深く眺めた。

広大な芝生が敷き詰められた中庭の向こうには、ファハド大通り、その向こうにはタミミ・マーケット、そして白壁の家々が続いていた。家々のかなたには慎太郎のお気に入り、白いモスクが見えていた。

そして、その遙か向こうには断崖が山のように連なり燦燦と降り注ぐ太陽の陽射しを受けて屋気楼(しんきろう)のように微かに揺れていた。

ニヤマトラは慎太郎がその光景をいつまでも眺めているのを静かに目を細めながら見守っていた。

そこにベルボーイのツワンが荷物を受け取りにやってきた。ツワンは慎太郎の急な出発に驚きしきりに残念がってくれた。

旅支度をしてニヤマトラ、ツワンと一緒にレジデンスのレ

セプションホールに降りて行くと、リヤド支店の同僚の笠原、オスマが既に待っていた。

「こんにちは、池波さん、いよいよ帰国ですね。いろいろとお世話になりました。今日は、私が空港までお伴をさせて頂きますので宜しくお願いします。お話しさせてもらいました通り、まず、東京レストランで夕食をとって頂き、それから空港に参ります。フライトまでは十分な時間がありますのでごゆっくりして下さい」

笠原はスケジュールを説明した。笠原には、リヤド到着から出発まで世話を掛けっぱなしだった。

「笠原君には随分とお世話になりました。有難う。空港は遠いから東京レストランで夕食をとったら、そこでお別れにしましょう。お気遣い有難う」

と、慎太郎は笠原に礼を言うとレセプションデスクに向かった。

レセプションデスクでは慎太郎を見送るためにファハド、ハリド、それに非番のアブダラー、ハリリまでが皆揃って待っていた。慎太郎は、一人一人握手をすると、最後に、いつ

もの通りおどけて大きな受付テーブルの上にあるガラス容器に盛られたリンゴを眺めた。すると、ファハドが急いでその内から良さそうなものを選んで慎太郎に手渡した。慎太郎は笑顔で礼を言いながら、ファハドにそれをかざして見せた。ファハドは嬉しそうにそれを見ていた。

すると、燕尾服のアブダラーが慎太郎に、

「ミスター・イケナミ、アラビア語でさよならを何というかわ知っているかい」

と訊いてきた。慎太郎がとぼけて知らないと言つと、アブダラーは得意げに、

「マーサラマというのだ」

と身をそらしながら慎太郎に教えた。慎太郎が、

「マーサラマ」

と言つと、アブダラーは親指を立ててグッドと言つた。

続いて、皆がマーサラマと慎太郎に向かって言った。慎太郎は、もう一度マーサラマと言つて、玄関のドアに向かった。

玄関を通る時、佐々木とは異なり前髪ではなく正に後ろ髪が引かれる想いがした。やはり二年間以上住んだ場所を去ると

いうのは感慨深いものだ。

東京レストランでは笠原と夕食を伴にした。笠原は、再度空港まで慎太郎を送ると言ってくれたが、慎太郎は空港が遠いこともあり固持した。笠原は慎太郎の性格を十分に分かっていたので今度は素直に慎太郎に従った。

笠原は、別れ際に、

「それでは、今度は、東京でお会いしましょう。楽しみにしています。快適な東京までのフライトをお楽しみください」と言って慎太郎と固い握手をした。

慎太郎も笠原の無事を祈りつつ礼を言って東京レストランを後にした。

東京レストランから空港まではオスマの運転で向かった。

慎太郎のための最後の運転だ。

空港に着くと、オスマは荷物をすべて赤帽に預け慎太郎の手を何度も何度も強く握り締めた。

慎太郎もその都度強く握り返した。

オスマは目を潤ませていた。

「ミスター・イケナミ、お元気で」

オスマは口下手でいつも多くを語らないが慎太郎はオスマの気持ちを十分に分かっていた。

「マーサラマ」

慎太郎はアラビア語で言った。オスマはこれを聞いてニコツと笑い、

「マーサラマ」

と応えた。最後に、

「オスマ、いろいろと有難う、シユ克蘭・ジャジーラン(大変有難う)」

と言うと慎太郎は空港ビル内に向かった。

オスマは、赤帽と空港ビルに入って行く慎太郎の後ろ姿をいつまでも見つめていた。

慎太郎の乗ったトリプルセブンはバーレーンからの到着が遅れたため出発も一時間ほど遅れた。その間イブラヒムやスルタンと親交の深かった慎太郎にも捜査の手が及ぶので

はないかと気が気ではなかった。幸い追手の影はなかった。

慎太郎は、ようやく飛び立ったジェットの中で遠ざかって
行くリヤドの遠景を感慨深げに眺めていた。

慎太郎は、曲がりなりにもプロジェクトKを実現させる
ことが出来た。その充実感があった。

そして、何よりも二度目の滞在では最初に比べて一段と深
くサウジを味わうことが出来た。香木、アラブ料理、蜂蜜、
デーツ・・・貴重な体験もした・・・

イブラヒム、スルタン、ハッサン、オスマ、そしてラミア、
さらば

サウジよ、さらば

しかし、決して忘れはしない、慎太郎は機内でそう呟いて
いた。